



TITLE:

教坊記辨附望江南菩薩蠻小考

AUTHOR(S):

村上, 哲見

---

CITATION:

村上, 哲見. 教坊記辨附望江南菩薩蠻小考. 中國文學報 1959, 10: 96-113

ISSUE DATE:

1959-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/176708>

RIGHT:

# 教坊記辨附望江南菩薩蠻小考

村上哲見

京都學藝大學

## I 教坊記辨

唐の崔令欽著わすところの「教坊記」一卷は、唐の開元年間（七二三—七四一）における教坊、すなわち宮廷音樂所に關する見聞を録した小冊であるが、この中に、三百二十四の樂曲の名を列記した部分がある。これは唐代の樂曲名の記録として最も豊富なものであり、従つて、この書物がいつ書かれたか、著者がいかなる人物であるかということは、この書物の信憑性と直接に關連するので、唐代の樂曲を論ずる上に、必ずしも小さな問題ではない。

この書物は、今までに知るところでは、單行の刊本はなく、つぎにあげる六種の叢書に收録されて傳わつてゐる。

「類說」 宋、曾慥編

「說郭」 元、陶宗儀編明鈔本、陶珽重較本同。

「古今說海」 明、陸楫編

「古今逸史」 明、吳琯編

「五朝小說」 明、編者未詳

「續百川學海」 明、吳永編

（右のほかに、清の邵懿辰の「四庫全書簡明目錄標注」、及び莫友芝の「郎亭知見傳本書目」には、「格致叢書本」なるものを載せるが、京都大學附屬圖書館並びに同大學人文科學研究所に藏する「格致叢書」は、どちらも「教坊記」を收めていない。）

（一九五七年に、北京古典文學社から、「中國文學參考資料小叢書」の一冊として排印本が出されたが、これは「古今說海」所收のものを底本として明鈔本「說郭」との異同を註記し、「全唐文」所録の序を加えたものである。）

右の中、「說郭」以下五種の叢書の中にみえる「教坊記」は、若干の文字の異同を除けば、記事の内容、序列等全く同じである。曾慥の「類說」は、從來は傳本がすくなく、なかなか見られなかつたもので、最近景印本が刊行され

て（一九五五、北京、文學古籍刊行社）、容易に見ることができるとなつたのであるが、これに録する「教坊記」は、「説郭」本等と著しい差異がある。

すなわち「説郭」等では曲名を列記した部分のほかに、十五條の記事を載せるが、「類説」では、曲名はなく、十七條の記事を録し、その中の九條は「説郭」等にはみえないものである（「類説」の標目によつていえば、失落、打鼓、打球墮馬、筋斗、聲伎兒、四女善歌、賣假金賊、娘子眼破、左轉、と題する九條）。

また重複する八條も、語句の異同が甚だしいが、概ね「類説」のしるす方が簡略である。たとえば「説郭」等における第一行に

西京右教坊在光宅坊、左教坊在仁政坊。右多善歌、左多工舞。蓋相因習。

（大意）長安では右教坊は光宅坊に、左教坊は仁政坊（古今説海）では「延政坊」にある。右教坊には歌のうまいものが多く、左教坊には舞のじょうずなものが多い。おもうに傳統的にそうなつてゐるのだ。）

教坊記辨附望江南菩薩蠻小考（村上）

とあるのが、「類説」では、單に  
左右兩教坊、右多善歌、左多工舞。  
とだけになつてゐる。

次に、「説郭」等では、記事のくぎりは行を換えてゐるだけだが、「類説」では、各條に、二字乃至六字の標目を掲げている。また記事のくぎり方のずれるところが一箇所ある。すなわち、「類説」本の第五、「擲彈家」と題する條のはじめ、「平人女……謂之擲彈家」の二十四字は、「説郭」等では、前條（「類説」の標目では「雲韶」）のおわりに續いてゐる。これは内容からみると、「類説」のくぎりかたの方がよいようである。

「全唐文」（卷三九六）に崔令欽の「教坊記序」というのが録されているが、これはさきにあげたどの本にもみえない。

要するに、「教坊記」には、現在二通りの本があるが、どちらも抽出抄録したもののように、原著のままではないであらう。ただ、字句についていえば、「説郭」の類の方が、比較的には原文に忠實なようである。また、「唐書・

藝文志」(甲部經錄樂類)に「崔令欽教坊記一卷」と著録されているのをみれば、はじめから大部の本ではなかつたであろう。宋の晁公武の「郡齋讀書(後)志」にも一卷として録されている(「舊唐書・經籍志」、陳振孫「直齋書錄解題」にみえない)。

「教坊記」各本とも、末尾に「唐崔令欽撰」と作者の名をしるしているのは、「唐書」と一致するが、この「崔令欽」とは、いかなる人物であらうか。「四庫全書總目提要」には、つぎのようにしるされている。

教坊記一卷、唐崔令欽撰。是書唐書藝文志著錄。又總集類中、載令欽註庾信哀江南賦一卷。然均不言令欽何許人。蓋修唐書時、其始末已無考矣。卷一百四十 子部小說家類(大意)「教坊記」一卷、唐の崔令欽の著。この書物は「唐書」の藝文志に著録されている。またこの藝文志の總集類の中に、令欽の註した「庾信哀江南賦」一卷が載せられている。しかし、どちらも令欽がいかなる人であるかをのべていない。おもうに、「唐書」を編集するとき、その事蹟はすでに攻究しよ

うもなかつたのであらう。

このようにかつては作者の素姓が明らかでなかつた上に、この書が、はたして唐人の著作であるかどうかを疑わせるような記述がある。清の沈雄の「古今詞話」にいう。

三臺舞曲、自漢有之。……教坊記亦載五七言體。如不寐倦長更、披衣出戶行。月寒秋竹冷、風切夜窓聲。傳是李後主三臺詞。雁門關上雁初飛、馬邑關中馬正肥。陌上朝來逢驛使、殷勤南北送征衣。傳是盛小叢三臺詞。

(大意)三臺の舞曲は、漢代より存在する。……「教坊記」も五言および七言の體を載せている。たとえば、(寐られずして長更に倦み、衣を披き戸を出でて行く。月は寒くして秋竹は冷やかに、風は切に夜窓に聲あり)。李後主の三臺詞であると傳える。「雁門關上雁初めて飛び、馬邑關中馬正に肥ゆ。陌上朝來驛使に逢えば、殷勤に南北に征衣を送る」。盛小叢の三臺詞であると傳える。

現存の「教坊記」には、各本とも、この「三臺詞云々」の記事は全くみえないのであるが、もしもこれが「教坊記」の逸文であるとすれば、五代末の李後主の名がでく

るからには、唐人の著作ではありえないことになる。（盛小叢の何者たるかは未詳）。沈雄の「古今詞話」には、奇怪な記述がすくなくないので、かならずしも信賴するに足りないが、頭から無視することもできない。

（宋の楊偁に同じく「古今詞話」と題する著書があるが、沈雄のは全く別の本である。楊偁の「古今詞話」はいま傳わらず、民國の趙萬里編「校輯宋金元人詞」にその輯本を収める。）

清末の文學者、王國維は、かつて「唐書」の宰相世系表に「崔令欽」の名を見出し、これを玄宗・肅宗のころの人と推定した。

令欽時代雖不可考、然唐書宰相世系表有國子司業崔令欽。乃隋弘農太守宣度五世孫。唐高祖至玄宗五世、宣度與高祖同時。則其五世孫令欽、當在玄宗二宗之世。其書記事訖於開元、亦足略推其時代。唐寫本春秋後記背記跋 觀堂集林卷二一

（大意）令欽の時代は確かめられないけれども、「唐書」の宰相世系表に「國子司業崔令欽」というのがある。その人は隋の弘農郡の太守、崔宣度の五世の孫にあたる。唐の高祖から玄宗

まで五世であるし、崔宣度は高祖と同時代である。とすれば、その五世の孫である令欽は、きつと玄宗・肅宗の代に存在したにちがいない。その書へすなわち「教坊記」に記するところが開元年間におわつてゐるのも、また、その時代を大體推量させるに充分であらう。）

また近年、任二北氏は、その著「敦煌曲初探」において、「全唐文」にしるす崔令欽の小傳が、王國維の推定に一致することを指摘している。

令欽、開元時官著作郎。歷左金吾衛倉曹參軍、肅宗朝遷倉部郎中。全唐文卷三九六

（大意）崔令欽は、開元年間に著作郎の官にあつた。左金吾衛倉曹參軍を歴て、肅宗の代に倉部郎中にすんだ。）

任氏は更に、この「全唐文」に錄された「教坊記序」（現存の「教坊記」缺にはかけている）に、

今中原有事、漂寓江表。追思舊遊、不可復得。粗有所識、即復疏之。

（大意）いま中原に騷亂があり、江南に流寓している。かつての交遊をおもいかべるが、もはや昔に返ることもできぬ。い

ささか記憶するところがあるので、ここにのべてみる。）

とあり、またこの文中に「玄宗」の語がみえるところから、「教坊記」の成立を、肅宗の寶應元年（七六二）と推定している。

以上で、「教坊記」の著者、崔令欽の經歷・時代は、概ね明らかとなつたようであるが、疑いをもつてみるならば、「唐書」の世系表は、その細部に至つては、全面的に信頼できるものではないし、「全唐文」所録の「教坊記序」は、現存のどの本にもみえないものであり、その「小傳」も、もとづくところがあきらかでない。結局、以上の根據だけでは、なお不充分というほかはないであらう。

私はここで更に新たな資料をいくつか提出して、王・任兩氏の推定が、おそらく誤まりでないことを裏づけたいとおもう。

〔1〕李華の「潤州天鄉寺故大德雲禪師碑」（文苑英華卷八六一）および「潤州鶴林寺故經山太師碑」（文苑英華卷八六二）に、「禮部員外郎崔令欽」の名がみえる。また劉長卿に「寄萬州崔使君令欽」と題する詩がある（劉隨州詩集卷

三）。李華（？—七六六）・劉長卿（七〇九—七八五？）ともに開元年間の進士であり（劉は開元二一、七三三、七三五）、これらと同時代に「崔令欽」なる人物が存在したことが知られる。

〔2〕「樂府詩集」（卷八〇）の熱戲樂の條に引く「教坊記」の文は、現在の「教坊記」にはみえず、「全唐文」に録する序の一部分である。したがつて、「全唐文」所録の「教坊記序」は、その出所が明らかでないのであるが、いまの「教坊記」各本の逸したものとして、ほぼ信頼してよいであらう。この序の末には、

開元中、余爲左金吾。

（大意）開元年間に、自分は左金吾衛の役人であつた。）

とある。

〔3〕「教坊記」の中には、天寶以後の記事はないし、また教坊をめぐる逸話の類のみで、歌辭にわたる條はない。沈雄「古今詞話」のひくところは、同名の異書があつたか、おそらくは、沈氏の誤記であらう。一步退いて、五言および七言の三臺詞が「教坊記」の逸文であつたとしても、

「李後主」あるいは「盛小叢」の部分は、沈氏の加えたものであらう。何となれば、「樂府詩集」には「教坊記」がひかれており、編者・郭茂倩がこの書物を資料として使用したことはあきらかであるが、その「樂府詩集」には、「古今詞話」にみえる三臺詞が、二首とも無名氏作として録されているからである。

〔4〕「教坊記序」に著者崔令欽みずから「開元年間に自分は左金吾の役人であつた」とのべている。「教坊記」によれば右教坊は光宅坊に在つた（前出）とあるが、それは皇城警衛軍たる左金吾衛の在つた永興坊とともに大極宮の東側にあり、それ程へだたつていない。したがつて左金吾衛倉曹參軍事（主計主任のような職か？）の職にあつた崔令欽は、當時衆目をあつめた教坊について、必ずや見聞するところすくなくあつたであらう。「教坊記序」の中のつぎの文は、よく讀めないものであるが、この間の消息を傳えるものようである。

開元中、余爲左金吾、倉曹武官十二三坊中人、每請祿俸、每加訪問、盡爲予說之。

教坊記辨附望江南菩薩蠻小考（村上）

〔大意〕開元年間に私は左金吾衛の役人であつた。倉曹の武官の中、十人に二三人はこの坊の人で、俸祿を受け取りにくるごとに、いつもたずねてみたところ、一々わたしのために語つてくれた。——（誤脱があるようにもおもわれる。）

以上の資料から、崔令欽なる人物について知りうることを整理すると、つぎのようになる。

〔1〕 家系 唐書卷七十二 宰相世系表。

崔宣度隋弘農郡太守——公業——元植——

——茂袁州刺史——藝

——班合州刺史——銳起居舍人

——令欽

〔2〕 つぎの諸官を歴任した。（いまかりに「大唐六典」によつて位階の順に並べる）

左金吾衛倉曹參軍事 全唐文所錄教坊記序。全唐文小傳。

禮部員外郎 李華文。

著作佐郎 說郭本教坊記。

倉部郎中 全唐文小傳。

著作 郎 古今說海本教坊記。全唐文小傳。(ただし「全唐

文」に「開元時」とあるのは、位階の順から考えると、疑が  
わしい。)

國子監司業 唐書世系表。

萬州(四川省)刺史 劉長卿詩。

〔3〕 安史の亂のときに江南に流寓し、玄宗の死後まもなく「教坊記」を著わした。全唐文所錄教坊記序。

任二北氏は一應玄宗の崩じた年すなわち寶應元年(七六二)に成立したものと假定しているが、當つていないとしても、この前後ほど遠からぬ時期のことにはちがいない。

〔4〕 「教坊記」のほかは、「庾信哀江南賦註」一巻の著書がある。唐書藝文志。

なお民國の胡適博士は「詞的起源(詞の起源)」なる論文において、長短句の詞は中唐に起つたもので、早くとも八世紀末以後のことであると斷定したが、その直後に、王國維から、彼が論證に使用した「菩薩蠻」・「憶江南」等の曲が「教坊記」にみえることを指摘され、「教坊記」に

錄する曲名が、原書のままであるとは限らないとのべたが、いささか苦しまぎれの遁辭のようである。さきに述べたように、いま傳わつてゐる「教坊記」が原本のままでないことは、ほぼ確かであるが、それにしても、都合の悪い部分はみな後人の附加したものと斷定するのは勝手すぎる。傳寫の間に、多少の誤脱を生ずることは考えられるが、各本のひとしく載せるところは、他に確證のない限りは、一應もとのままとみるほかはないであらう。

長短句の詞起於何時呢？ 我們的答案是：長短句の詞起於中唐、至早不得過西歷第八世紀的晚年。「詞的起源」清華學報第一卷第二期。

(大意) 長短句の詞はいつ起つたものであろうか。われわれの答えは「長短句の詞は中唐に起り、早くとも八世紀末よりさかのぼることはできない。」

以上論詞的起源、初稿寫成後、曾送王靜菴先生、請他指出。王先生答書說：

……至謂長短句不起于盛唐、以詞人方面言之、弟無異議。若就樂工方面論、則教坊實早有此種曲調(菩薩蠻



之屬)、崔令欽教坊記可證也。

我因此檢教坊記、其中附有曲名一表、共載三二四調、果有菩薩蠻憶江南等曲調。……但教坊記中的曲名表、我却不能認爲原書的原文、不能認爲開元教坊的曲目。我疑心此表、曾經後人隨時添入新調、此種表本只供人參考、以多爲貴、添加之人意在求完備、不必是有心作僞。同上(「大意」)以上詞的起源を論じ、初稿を書きあげてから、いつたん王靜菴(すなわち王國維)先生のところへ送り、批評をおねがひした。王先生の返書にはつぎのようにのべてあつた。

……長短句は盛唐に起るものではないという點になると、詞人の方についていうなら、わたくしも異論はありませんが、樂工の方についていうなら、教坊には實に早くからこの種の曲調へすなわち菩薩蠻の類があつたので、崔令欽の「教坊記」が證據としてあげられます。

自分はそこで「教坊記」をしらべてみたところが、その中に曲名の表がついていて、合計三百二十四の曲が載せられており、はたして「菩薩蠻」・「憶江南」等の曲調があつた。……しかし「教坊記」の中の曲名表は、自分は原書の原文と認めることはできないし、したがつて開元年間の教坊の曲であると認めるこ

とはできない。自分は疑うのだが、この表は、のちの人が隨時に新しい曲を加えたことがあるのではなからうか。この種の表は、單に人の參考に供するまでで、多きを以てよしとする。だからさし加える人も完全なものにしようとするつもりなので、必ずしも僞作の意圖があつたわけではないであらう。」

なお「菩薩蠻」・「憶江南」については、後章を参照されたい。

## Ⅱ 望江南小考

韓偓の作と傳えられる小説「海山記」に、隋の煬帝の「望江南」というのが八首錄されている。

開溝通五湖北海、溝盡通龍鳳剎、帝多泛東湖、因製湖上曲望江南八闕云、湖上月、偏照列仙家。水浸寒光鋪枕簟、浪搖晴影走金蛇。偏稱泛靈槎。光景好、輕彩望中斜。

清露冷侵銀兔影、西風吹落桂枝花。開宴思無涯。云云。

(「大意」)水路を開いて五湖および北海を連絡した。水路はみな龍鳳の船を通行させる。煬帝はたいいてい東湖で船あそびをした。そこで、「湖上曲」と題する「望江南」の曲調の歌、八首を作

つた。その歌詞にいう、「湖上の月、偏えに照らす列仙の家。

水は寒光を浸して枕簾を鋪き、浪は晴影を揺るがして金蛇を走らしむ。偏えに稱<sup>か</sup>う靈槎を泛ぶるに。 光景好し、輕彩望中に

斜めなり。清露冷やかに侵す銀兔の影、西風吹いて落とす桂枝の花。宴を開けば思い涯無し。」以上第一首

明の胡震亨はこれにもとづいて、「望江南」の曲は隋の煬帝の創製にかかるとする。唐音癸籤一三

望江南：海山記、隋煬帝爲西苑、鑿池汎龍鳳舸、製望江南八闋。後唐李德裕用其句拍、改爲謝秋娘。劉白亦有作。

〔大意〕望江南——「海山記」に、隋の煬帝が西苑を作り、池を掘り龍鳳の船をうかべ、「望江南」八首をつくつたとある。

のち唐の李德裕がその曲調を用い、「謝秋娘」という名に改めた。劉禹錫、白居易にもこの曲による作品がある。

謝秋娘・夢江南・憶江南・江南好：李德裕鎮浙西日、悼亡妓謝秋娘、用隋煬所作望江南調、撰謝秋娘曲。後仍從本名。亦曰夢江南。白樂天作此詞、改爲憶江南。後人又因樂天首句、以江南好名之。劉禹錫亦有作。凡曲名遞改換、多如此。

〔大意〕謝秋娘・夢江南・憶江南・江南好——李德裕が、浙西

の長官であつたとき、なくなつた妓女の謝秋娘を悼み、隋の煬帝が作つた「望江南」の調を用いて、「謝秋娘」の曲を作つた。のちはり本來の「望江南」の名も用いられ、また「夢江南」もいう。白樂天がこの詞を作り、「憶江南」と改めた。のちの人はさらに白樂天の詞の最初の句によつて、「江南好」と名づけた。劉禹錫にも作品がある。およそ曲名がだんだんとうつりかわつていく事情は、たいていこのようなものである。

しかし、清朝の詞學者たちは、双調（前後二段から成るもの）の「望江南」は、宋にはじまるという理由のもとに、「海山記」に載せる八首は、宋人の僞託であるとする。

〔望江南〕此調、隋煬帝有八闋。但白香山三詞、晚唐襲之、皆係單調、至宋方加後疊。故知隋詞、乃贗作者無疑。

清 萬樹 詞律一

〔大意〕この調、隋の煬帝に八首の作品がある。しかし、白居易の三首、および晩唐のこれを用いたもの、みな單調へ一段で一首をなすものゝで作られており、宋代になつてからはじめて後段のくり返しが加えられたのである。だから、隋の作品にはせものに違いなことが知られる。

なお双調望江南が宋にはじまるということは南宋の人がす

でいつている。

(望江南) 予考此曲、自唐至今、皆南呂宮、字句亦同。

止是今曲兩段、蓋世今曲子無單遍者。宋 王灼 碧雞漫志

五

(大意) この曲を考察するに、唐代から現在まで、ずっと南呂宮〈音階の種類〉であり、字句も同じである。ただ現在は前後二段になっている。おもうに現在の曲には一段のものはない。) ちなみに白居易の「憶江南」をあげてみるならば、つぎのとおりである。

江南好、風景舊曾諳。日出江花紅勝火、春來江水綠如藍。  
能不憶江南。 白氏文集三四

(江南の好き、風景舊曾て諳んず。日出ずれば江花紅きこと火に勝り、春來れば江水綠きこと藍の如し。能く江南を憶わざらんや。 以上第一首)

すなわち、「海山記」にみえるものは、「三・五・七・七・五」の形が、前後二回くり返されて一首を成すに對し、白居易のものは一段で一首である。

ところが、王重民輯「敦煌曲子詞集」、および任二北輯

教坊記辨附望江南菩薩蠻小考(村上)

「敦煌曲校録」によれば、いわゆる敦煌文書の中に、双調の「望江南」詞がみいだされており、任氏の「敦煌曲初探」では、これについてつぎのようにのべている。

辭雖作於五代、調則早爲唐或唐以前人所創無疑。顧其調在此時、已習用双疊、顯爲事實。敦煌曲初探 第二章

(大意) 歌詞は五代に作られたものであるが、曲調の方はとくに唐あるいは唐以前の人につくられていたものにちがいない。おもうにその曲調は、このときに、もうずっと前後二段で作られて來ていたことは、あきらかに事實である。

(なお王重民輯「敦煌曲子詞集」では、双調の「望江南」が五首あるのに、任氏の「敦煌曲校録」では四首となっているのは、王氏の書の第五首を、任氏は單調二首とみなしたからである。また、出所はつぎのとおり。第一首、P三二二八、S五五五六。第二首、P三二二八、P二九〇九、P三九一一。第三首、P三二二八、P二八〇九、P三九一一、S五五五六。第四首、P三二二八、S五五五六。このほか、王氏は、P二八〇九、P三九一一にみえる詞を双調一首とする。)

また「敦煌曲初探」によれば、唐圭璋氏もつぎのようにのべているという。

「詞律」謂「望江南」、唐時皆係單調。至宋方加後疊。

徐誠菴補注「詞律」、亦信其說。今唐詞出。乃知萬紅友說之誤。唐圭璋 敦煌唐詞校釋（いまこの書物はみることができないので、任氏の引用するところによる。）

（大意）「詞律」では、「望江南」は唐代ではみな一段で作られており、宋代になつてはじめて後段が加えられたといつてゐる。徐誠菴△「詞律拾遺」の著者、徐本立△も「詞律」に補註を加え、やはりその説を信じてゐる。いま唐代の作品△敦煌出土のものをいう△があらわれたので、萬紅友△「詞律」の著者、萬樹△の説が誤まつていたことがしられる。）

敦煌出土の作品四首は、任氏自身の考證にみえたとおり（「敦煌曲初探」第五章）、五代のものであることはほぼ間違いないので、これから唐あるいは唐以前より双調の體が存したとするのは、いささか飛躍のようであるが、双調が宋人にはじまるという従來の説もまた検討しなおさなければならぬ。したがつて、「海山記」にみえる「望江南」八首も、双調なるがゆゑに宋人の偽作とは、にわかに斷定できなくなつたわけであるが、小説「海山記」そのものについ

ていうならば、魯迅が「唐宋傳奇集」附「稗邊小綴」にしているとおりの、この小説はもと宋の劉斧の編する「青瑣高議」後集五にみえ、「說郛」、「古今逸史」、「古今說海」などにも收録されているが、みな作者の名をしるさず、清の陳蓮塘の編する「唐人說薈」（一名「唐代叢書」）に至つてはじめて韓偓の名を冠しているのであり、その内容の蕪雜さより推しても、韓偓の作ではないといふことは動かせないであらう。また煬帝作の「望江南」も、あまりにかけ離れた存在として、信ずることはできない。

従來「望江南」の曲の淵源として信ぜられてきたのは、「唐音癸籤」にもみえていた李德裕を創始者とする説である。この説は現在しられるところでは、晩唐の段安節にはじまる。

望江南、始自朱崖李太尉鎮湘西日、爲亡妓謝秋娘所撰。

本名謝秋娘、後改此名。亦曰夢江南。段安節 樂府雜錄 知不足齋叢書本

（大意）「望江南」は、珠崖の李太尉へすなわち李德裕が浙西觀察使であつたとき、なくなつた妓女の謝秋娘のためにつく

つてやつたものにはじまる。もとは「謝秋娘」という名であつたが、のちにこの名に改めた。また「夢江南」ともいう。）

宋の郭茂倩の編する「樂府詩集」、王灼の「碧雞漫志」など、「望江南」〔「樂府詩集」は「憶江南」〕の解説に、みなこれを引用している。また「四庫提要」も、これによつて「海山記」の「望江南」八首の僞託なることを證しており、魯迅の「唐宋傳奇集」稗邊小綴も、「海山記」の解説に「提要」を引いている。

所錄煬帝諸歌、其調乃唐李德裕所作望江南調、段安節樂府雜錄、述其緣起甚詳。大業中安有是體。提要一四三子部小說家類存目

〔大意〕「海山記」に錄されている煬帝の歌の曲調は唐の李德裕の作つた「望江南」である。段安節の「樂府雜錄」にその由來がたいへんくわしく述べられている。大業年間（六〇五—六一六）にこの形式があるはずがない。）

李德裕の作つた「謝秋娘」の詞はいま傳わつていないのであるが、白居易は「憶江南」詞にみづから注して、「此曲亦名謝秋娘」（この曲はまたの名を「謝秋娘」という）としているから、白居易が當時流行の「謝秋娘」の曲

調に従つて詞を作り、別に「憶江南」と題をつけたものとおもわれ、その形式は同じであつたと考えられる。そしてそれ以後「望江南」の詞牌のもとに作られる詞は、すべて白居易の「憶江南」と全く同じく、「三・五・七・七・五」のかたちである（單調・双調の別はしばらくおく）。

しかしながら、「樂府雜錄」の「もともと謝秋娘という名だつたが、のちにこの名（望江南）に改めた」という説はいかがであらうか。というのは、先述の「教坊記」に「望江南」という曲名があげられているからである。開元年間の教坊に「望江南」の曲が存したことがあきらかとなれば、「樂府雜錄」の説は、そのまま受け取れることはできない。

任二北氏は、「太平御覽」にみえる「樂府雜錄」の異文にもとづいて、盛唐の「望江南」と中唐以後の「望江南」とは、名は同じだが別の曲であらうと推定している。

太平御覽引樂府雜錄之文、於望江南條作、本名謝秋娘、後進入教坊、遂改名。使此說果確、似乎謝秋娘先爲私人之創調、創名。後入當時之教坊（絕非崔氏所記盛唐之教

坊)、始被以望江南名、自此、三五七七五之長短句調、遂概用望江南之名以行。敦煌曲初探 第五章

〔大意〕「太平御覽」に「樂府雜錄」の文が引かれているが、「望江南」の條ではつぎのようになっている。「もとの名は謝秋娘、のち教坊に進め入れられ、ついに名を改む」へすなわち、通行の「知不足齋叢書」本の「後改此名」のところが「後進入教坊、遂改名」となっている。この説がはたしてたしかならば、「謝秋娘」はじめは個人が新しい曲を作り、新しい名をつけたもので、のちに當時の教坊へ決して崔令欽のしるす盛唐の教坊ではないへに入れられ、はじめて「望江南」の名をつけられた。これより三五七七五の長短句の調は、とうとうすべて「望江南」の名をもつて通行するようになったものようである。任氏のこの説は、白居易以前の「望江南」詞が、まったく傳わらないために、慎重を期したらしいが、いささか思ひすごしのように感じられる。

「教坊記」が著わされたのは、その序に「玄宗」の廟號がみえるところよりすれば、玄宗の崩じた七六二年以後と考えられるし、白居易が「憶江南」詞を作つたのは、蘇州刺史を免ぜられてから、洛陽に在るころ、すなわち八三〇

年前後のことと考えられ、また李德裕の作は、彼が浙西觀察使の任に在つた長慶二年(八二三)から太和三年(八二九)の間(舊唐書)のものと思われるから、「教坊記」より距たること六十年餘りにすぎない。盛唐から中唐にかけて、わずか半世紀餘りの間に、宮中音樂所たる教坊において、一つの曲がそれほど簡単に失われ、別の曲にその名を冠することがあるとは考えにくい。むしろ「樂府雜錄」の誤記と考える方が、より妥當なのではあるまいか。

また任氏は、さきに引いた文のあとに、つぎのようについている。

望江南之原調究竟如何、與謝秋娘之原名何、以無人援用、均晦而不彰矣。例如敦煌曲內、有望江南八首、皆晚唐五代之作、皆此種長短句、雖其作詞時間、前後相距八十年久、而調名一貫用望江南、則無稍異也。

〔大意〕「望江南」のもとの曲へすなわち任氏のいう盛唐の「望江南」が結局どのようなものかということ、および「謝秋娘」というもとの名へ中唐以後の「望江南」の原名の意をなぜだれも用いる者がないのかということは、どちらもぼんやりして

あきらかでない。たとえば、敦煌出土の曲詞の中に、「望江南」が八首あり、みな晩唐、五代の作品であるが、この種の長短句はすべて、作詞の時期が前後八十年の久しきにまたがつているのに、調名は一貫して「望江南」を用い、ちつとも違ふものがない。

この疑問は、盛唐の「望江南」と中唐以後のそれが別のものであるという假定から生じているのであつて、「望江南」が盛唐以來の正名であり、「謝秋娘」および「憶江南」は、一時流行の歌詞による別名であつて、實は一貫して同一の調であると考えれば、この疑問もおのずから解決されるようにおもわれる。

〔附記〕 通常「望江南」の別名とされている「夢江南」にも問題があるが、いまはつきりした考えをもつに至らないので、觸れなかつた。

### Ⅲ 菩薩蠻小考

平林漠々煙如織、寒山一帶傷心碧。暝色入高樓、有人樓上愁。玉階空佇立、宿鳥歸飛急。何處是歸程、長亭更短亭。

教坊記辨附望江南菩薩蠻小考（村上）

（平林漠々として煙織るが如く、寒山一帶傷心の碧。暝色高樓に入るとき、人有り樓上に愁う。玉階に空しく佇立すれば、宿鳥歸り飛ぶこと急し。何處ぞ是れ歸程なる、長亭更らに短亭。）右の菩薩蠻一首が李白の作であるというのは、宋人の説である。「湘山野錄」には、この詞をひいて、つぎのようにべている。

此詞不知何人寫在鼎州澧水驛樓、復不知何人所撰。魏道輔泰見而愛之。後至長沙、得古風集於子宣內翰家、乃知李白所作。宋 釋文瑩 湘山野錄上

（大意）この詞は、何者かが、鼎州（湖南省常德縣）の澧水の驛樓に書いたもので、また誰の作かもわからなかつた。魏泰がみて氣に入つた。のち長沙にやつてきて曾布の家において（李白の「古風集」を得、そこで李白の作であることがわかつた。）また南宋の黃昇の編する「唐宋諸賢絕妙詞選」（すなわち「花菴詞選」）も、これを李白の作として録し、つぎのような評語を加えている。

菩薩蠻・憶秦娥二詞、爲百代詞曲之祖。唐宋諸賢絕妙詞選

卷一

〔大意〕菩薩蠻と憶秦娥の二首の詞は、永遠の詞曲の祖である。

しかしながら明の胡震亨は、これを僞託なりと斷定した。

杜陽雜編云、大中初、女蠻國入貢。其人危髻金冠、瓔珞被體、人謂之菩薩蠻。當時倡優、遂製菩薩蠻曲、文士亦往々聲其詞。溫庭筠傳亦有宣宗愛唱菩薩蠻之說。知此詞出於唐之晚季。今李太白集有其詞、後人妄托也。唐晉葵

籤一三

〔大意〕「杜陽雜編」に云う「大中へ宣宗、八四七―八五九」

の初め、女蠻國入貢す。其の人危髻金冠、瓔珞體に被る。人之を菩薩蠻と謂う。當時の倡優、遂に「菩薩蠻」の曲を製し、文士も亦た往々にして其の詞を聲うたう。」と。溫庭筠の傳記にもやはり宣宗がこのんで「菩薩蠻」をうたつたという話がある。だから、この詞は唐の末にあらわれたものである。いま李白の集に「菩薩蠻」の詞があるのは、後人がいいかげんにくつつけたものである。）

（なお右の文中の「溫庭筠傳云云」は、「唐書」の傳にはなく、「北夢瑣言」、「唐詩紀事」などにみえる。）

宣宗愛唱菩薩蠻詞、令狐丞相 へ令狐綯 へ假飛卿 へ溫庭筠 へ所撰密進之。戒以勿洩。而遽言於人。由是疏之。孫

光憲 北夢瑣言

「杜陽雜編」は晩唐の蘇鶚の著わすところ、宋の錢易の「南部新書」にも同一の記事がみえる。ともかく胡震亨以後は、「菩薩蠻」の曲は、宣宗の大中初年につくられたもので、李白の詞は僞託であるとするのが通説となつてゐる。ところが「望江南」の場合と同様に「教坊記」を検すると、「菩薩蠻」の曲名がみえてゐるので、「杜陽雜編」の記事も、にわかに信ずることはできない。さらに任二北氏の「敦煌曲初探」によれば、敦煌文書の中にみいだされた「菩薩蠻」詞の一首は、その背記よりして、天寶以前の作と考えられるという。

別仙子、菩薩蠻各一首、同在斯四三三二卷中。據向達倫敦所藏敦煌卷子經眼目錄、此卷背後、錄壬午年龍興寺僧學便物字據。據佛祖統紀五三「玄宗勅天下諸郡、建開元寺、龍興寺」。天寶元年乃壬午、此字據可能寫於天寶元年。依常情、寫卷正面文字、必先寫、則此二辭可能寫於天寶以前、至遲不逾天寶元年也。敦煌曲初探 第五章

〔大意〕別仙子、菩薩蠻おのおの一首は、ともにスタイン四三



三二卷の中にある。向達の「ロンドン所藏敦煌卷子經眼目錄」によれば、この巻のうらには、壬午年に龍興寺の「僧學便物字據」〈六字意義未詳〉が録されている。「佛祖統紀」五三によれば、「玄宗天下諸郡に敕し、開元寺・龍興寺を建つ」とある。玄宗の天寶元年七四二がちょうど壬午であるから、この「字據」は天寶元年に書かれたとみることができ。ふつうの場合、寫卷のおもての文字が、かならず先にかかれる。とすれば、この二首の詞は天寶以前に書かれたとみることができ、おそらくとも天寶元年よりくだらないだろう。」

紙卷の両面に文字が書かれているばあい、どちらが表か裏かは、簡単に斷定できるものではないであろうし、また壬午年が天寶元年であるかどうかとも疑がわしくおもわれるが、一つの可能性としてならば、右の説もあながち否定し去ることもできない。

そこで最近では、「平林漠々」の「菩薩蠻」詞が、眞に李白の作であるとする説が、ふたたび有力になつてきている。「敦煌曲初探」では楊憲益という人の説をひきつつ、つぎのようにのべる。

近人楊憲益於所著零墨新箋內、主張「菩薩蠻」乃「驃

教坊記辨附望江南菩薩蠻小考（村上）

蠻」或「符詔蠻」之異譯。其曲調乃古緬甸樂、開天間傳入中國。李白原爲氏人、少時於此曲調、大概已習、方二十五歲左右、曾徘徊襄漢間、可能於湖南鼎州滄水驛樓、題此曲辭。北宋初年、文瑩湘山野錄謂見古風集內、此辭屬之李白、事有可能、並非荒誕云云。信如此說、驗之教坊記、奇男子傳、及敦煌卷子斯四三三二等所有資料、無不吻合、可知乃較爲接近事實者也。同書第五章

（大意）近ごろ楊憲益はその著「零墨新箋」の中で、つぎのように主張している。「菩薩蠻」は「驃直蠻」あるいは「符詔蠻」の異譯で〈實は同じもので〉ある。その曲調は古代ビルマの音楽で、開元天寶のころ、中國に傳來した。李白はもともと氏〈西南部の蠻族〉の人であるから、わかいときにこの曲調を、おそらく習得していたであろう。二十五歳ごろに、襄漢のあたり〈洞庭湖の北側一帯をいう〉をさまよっていたことがあるから、湖南省の鼎州〈常德縣、洞庭湖のすぐ西側に當る〉の滄水の驛樓にこの詞をかきつけるということはあり得る。北宋のはじめ、文瑩の「湘山野錄」に、「古風集」の中にみえていたので、この詞が李白の作であるといっているが、可能性のあ

る事で、決してでたらめではない。云云と。まことにこの説のとおりで、「教坊記」、「奇男子傳」へ唐の許棻の著わした小説、

〔附記2〕参照〕および敦煌文書のスタイン四三三二卷など、あらゆる資料とくらべあわせてみると、びつたり符合しないものはない。だから、わりに事實に近いものであろう。〕（いま

「零墨新箋」という書物は、みる事ができなかった。）

また龍沐勛氏も、その「唐宋名家詞選」の巻首にこの詞をかかげ、楊・任兩氏の説をひきながら、つぎのように注している。

以白之天才横逸、偶然興到、依新聲作長短句、亦非絶對不可能。

（大意）李白の從横に流れ出る天才をもつてすれば、たまたま興味がわけば、新しい曲によつて長短句を作るといふことも、絶對に不可能ではない。）

この種の説は、必ずしも最近突然あらわれたものではない。少し以前にも、華連圃氏「花間集注」（一九三五年）に、同氏に「菩薩蠻考」なる論文があることがみえ、また「敦煌曲初探」に、唐圭璋氏の「論李白菩薩蠻憶秦娥詞」なる論文があげられており、どちらもいまみることができない

のであるが、ともにこの「菩薩蠻」詞が眞に李白の作であると論じているようである。

私は「教坊記」に「菩薩蠻」の曲名がみえるかぎり、この曲が大中初年につくられたとの説は、もはや成立し難いと考えるが、一方、「平林漠々」の詞が李白の作であるとする説は、なお根據が薄弱であるように思う。

またこの問題は以上のような形式上から論ずるだけでなく、作品自體の分析からも考えられなければならないであろう。つぎにあげる明の評論家・胡應麟の説は、一見主觀的な印象論のようにみえるけれども、決して輕視することのできない一家の言である。

今詩餘名望江南外、菩薩蠻、憶秦娥稱最古。以草堂二詞出太白也。近世文人學士、或以實然。然予謂太白在當時、直以風雅自任、卽近軀盛行、七言律鄙不肯爲、寧屑事此。且二詞雖工麗而氣衰颯、于太白超然之致、不啻穹壤。藉令眞出青蓮、必不作如是語。詳其意調、絕類溫方城輩。

蓋晚唐人詞、嫁名太白耳。少室山房筆叢卷四一 莊嶽委談下（大意）いま詩餘の詞名で「望江南」のほかでは、「菩薩蠻」

と「憶秦娥」とが最古であると稱する。「草堂詩餘」にみえる二首の詞が李白の作というからである。近ごろの文人や學者にも、これを事實だとおもう者がいる。しかし、私がおもうには、李白は、かの時代に在つて、ひとすじに詩經風雅の道をもつて自負していた。だから近體の詩に七言律がさかんに流行していたのに、いやしんでつころうとしなかつた。ましてこの詩餘の製作などに意を向けるはずがない。さらに二首の詞は、美しくたくみなものではあるが、氣力はよわよわしいもので、太白の超然たる風格に比すれば、そのちがいは天地よりも甚だしい。もしも眞に李白の作であるとすれば、きつとこのような語句にはしなかつたにちがいない。その内容や調子をよくみれば、全く溫庭筠などとそっくりである。おもうに晩唐の人の作品で、李白の名をくつつけたにすぎないのであらう。

溫庭筠以前の詞として、時代の確實にしられるものは、白居易の「憶江南」や、劉禹錫の「竹枝」の類であるが、この「菩薩蠻」詞は、それら中唐の詞とくらべても、はなはだかけはなれたものであり、「花間集」などにみえる晩唐・五代の詞と接近した雰圍氣をもっていることは、一讀して歴然たるものがある。このように溫庭筠以前の詞とし

ては、あまりに孤立した風格をもつとの詞が、李白の作とするのはもとより、盛唐時代のもつと認めるためには、よほどの決定的な證據がなければならぬ。「菩薩蠻」の曲が盛唐時代に存在したということは、これが「教坊記」にみえているかぎり、ほぼ動かせない事實であらうが、だからといつて、この詞が盛唐時代のもつ、ということには、ならないのである。

#### 〔附記〕

- 1、桑原臨藏博士「蒲壽庚の事蹟」に、「菩薩蠻」は「木遠魯蠻」の異譯ならんとの説がみえ、任氏の「敦煌曲初探」ではこれを否定している。曲調とは直接に關係がないので、觸れなかつた。
- 2、唐の許棻の小説「奇男子傳」に、宰相郭元振の甥の郭仲翔が、南詔征討の軍に従がい、蠻族に敗れて捕えられ、諸蠻の洞窟を轉々としたのち、天寶十二年に「菩薩蠻洞」より逃れ歸つた話がみえる。なおこの物語りは、「太平廣記」(第一六六卷)に錄され、明の馮夢龍の編する「古今小說」(第八卷)にみえる「吳保安棄家贖友」と題する小説も、これをテーマとしたものである。